



TITLE:

「労働」と全体主義 ―「無限増殖運動」に抗するアーレント(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

百木, 漠

CITATION:

百木, 漠. 「労働」と全体主義 ―「無限増殖運動」に抗するアーレント. 京都大学, 2015, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2015-07-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19246>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

(続紙 1)

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	百木 漠
論文題目	「労働」と全体主義―「無限増殖運動」に抗するアーレント		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>ハンナ・アーレントの研究については、従来おもに政治哲学ないし政治思想史の立場から、「活動」論や「公共性」論に焦点が当たることが多かった。本論文は、アーレントが最も低く評価したと一般には了解されている「労働」の観点からその思想を再検討することを通じて労働と全体主義の親和性を明らかにするとともに、両者の根底に潜む「無限増殖運動」に対してアーレントがいかなる対抗案を講じたかを、資本主義論と経済思想史の視点をも加味しながら理論的に考察している。</p> <p>第1章では、『全体主義の起源』初版（1951年）発表後、アーレントがマルクス研究に向かった経緯に焦点を当て、それがその後の思想形成に大きく与っていることを論じている。すなわち、アーレントのマルクス研究は、二つの主著『全体主義の起源』と『人間の条件』（1958年）を繋ぐミッシングリンクをなしており、アーレントがマルクスの資本主義分析を批判的に摂取して、全体主義が資本主義と同型の「無限増殖運動」の構造をもつと認識するに至ったこと、のみならず同時にプラトン以後の西欧政治思想の伝統全体をも俎上に載せる壮大な構想へと至ったことを明らかにしようとしている。</p> <p>第2章では、アーレントとマルクスの労働思想を比較しながら、なぜ彼女が労働を限定的に捉えようとしたのかを考察している。すなわち、アーレントが批判しようとしたのは生命維持のための本来的な労働ではなく、近代社会において「仕事」や「活動」の要素をも取り込んで変容した「キメラ化した労働」だったと読み解いたうえで、この「キメラ化した労働」が資本主義と全体主義の「無限増殖運動」を駆動する本体と見なしうる以上、労働に生命維持以上の意義を見出そうとしたマルクスの思想が同時に厳しく批判されなければならなかった次第を論じている。</p> <p>第3章では、マルクスのテキストをめぐるアーレントによる「誤読」の内実を精査し、その「誤読」がいかなる思想的意義を有しているかを考察している。最大の誤読は両者の「労働」概念の差異に基づくものであるが、これまでアーレントにおいては見過ごされてきた「余暇」論にも踏み込んで両者の概念の相違を明らかにしつつ、それが「生産的誤読」としての意義を持つことを主張している。すなわち、「労働からの解放」というマルクス主義的ユートピアが余暇を活動ではなく大衆消費社会へと導くことで全体主義に接近することがアーレントによって感知されていたというのである。</p> <p>第4章では、アーレントの「社会的なもの」の概念を取り上げ、なぜ彼女がこれを批判的に論じたのかを「自然なものの不自然な成長」という表現に留意しながら解明しようとしている。著者はまず、「社会的なもの」は、自然的なものの運動が人為的なものの領域へと侵入し、公的領域と私的領域の境界線が曖昧化したところに成立すると捉える。そして、これが資本主義と全体主義の「無限増殖運動」を媒介する役割を果たしている以上、この流動的な運動に対して「世界」および「境界線」の安定性と永続性を取り戻していくことが必要だとアーレントは認識していたのではないかと、いう仮説を提示する。</p> <p>第5章では、「無限増殖運動」の対抗要因と考えられるはずの「活動」の両義性について検討している。すなわち、アーレントが高く評価した「活動」はときとして暴力的・破壊的帰結をもたらす可能性があるが、とりわけ現代は自然科学の領域におい</p>			

てこの種の危険性が生じており、「活動」の「新たな過程を始める」能力が科学技術の制御不可能な暴走を許し文明全体を危機に陥れかねないことを彼女は承知していたと著者はいう。この両義的な「活動」に対し、理想的な「活動の条件」として「世界」および「境界線」の安定性、さらにそれを作り出す「仕事」の意義をアーレント読解に即してあらためて強調している。

第6章では、アーレントが「キメラ化した労働」を批判する一方で、労働者の政治運動を賞賛したのはなぜかを考察している。アーレントが評価したのは「労働する動物」とは区別される「労働者」によって自発的に運営される評議会制度であり、1950～60年代のアメリカに現れた公民権運動や反戦運動・学生運動をアーレントが評価したのもこの視点によるとする。それは既存の秩序に対する異議申し立てから「境界線の引き直し」を通じて「世界の再構築」を目指すものである限り、「無限増殖運動」に対抗して複数的な「活動」と、「世界」の安定性を約束するものと捉えられたと主張するのである。

終章では、アーレントが近年再評価されている時代背景にも触れながら、人間と自然との一体化に触発された全体性への回帰に対して、あらためて「複数性」（活動）と同時にそれを安定化させる「世界性」（仕事）の意義が確認される。重要なのは諸要素の境界を明らかにしながら相互のバランスをとることであり、観照的生が目指す「永遠」を断念して、活動と仕事の組み合わせによって、あえて不完全な「可死—不死」の領域にとどまることが全体主義の「無限増殖運動」に対抗していく際のかなめであると結論づけている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文はハンナ・アーレントを題材としながら、一見すると全体主義と対立的な労働が逆説的に全体主義に道を開く理路を、単なる思想史的検討を超えて理論的に追求した意欲的な論文である。

アーレントに関してはおもに政治思想史の領域において検討されてきた経緯がある。その論点も、活動・仕事・労働の「人間の条件」をなす三条件のうち、公共圏における活動ないし政治を優位に置き、私的な領域における労働ないし経済の肥大化を戒めるといった側面が強調される傾向があった。本論文の特徴は、まず、このような一般的なアーレント理解に対して、緻密なテキストクリティークを駆使して、いまだあまり注目されてこなかったアーレントの側面を浮かび上がらせたところにある。

たとえば、アーレントの『全体主義の起源』と『人間の条件』の二つは彼女の主要な業績であるが、双方の関係はこれまであまり追求されることはなかった。これに対し、その狭間で行なわれたマルクス研究、殊に近年公表された草稿集『カール・マルクスと西欧政治思想の伝統』に両者の理論的媒介環を見出す試みは、佐藤和夫氏、マーガレット・カノヴァン氏、森川輝一氏等によって先鞭がつけられたとはいえ、いまだ十分に開拓されていない領域であったが、さらにそこでアーレントが行なった「生産的誤読」にこそ彼女の思想のコアが潜んでいるとする読解は独創的である。

その主張内容に関しても、アーレントが労働それ自体を否定したのではなく、仕事や活動を取り込んでキメラ化した近代固有の労働こそ「無限増殖運動」を通して全体主義に結びつくものと否定したのだとする本論文の基本的主張は、アーレントによるマルクス批判の理由と近代的労働の変容を同時に解き明かすものとして説得力がある。さらに、①流動的な無限増殖運動の決壊を堰き止め世界の安定性を担保するために、従来無視されがちだった「仕事」にアーレントは期待していたとする解釈、あるいは②従来、逆に特別視されがちだった「活動」も、それがテクノロジーと結びついたとき無限増殖運動に道を開きかねないとする解釈、さらに③「労働」もまた境界線の引き直しを通じて世界の再構築を図ろうとする限り、それ自体が全体主義の無限増殖運動を堰き止める橋頭堡たりうるとアーレントが期待していたとする解釈など、いずれをとっても逆説的だが、独創的な主張を、アーレントのテキスト読解に即しながら展開することに成功している。

さらに本論文の独創性は、アーレントの思想を政治思想史の領域に閉じ込めなかった点に求めることができる。全体主義の「無限増殖運動」が本論文のキーワードの一つだが、これはアーレントが斥けたと従来解釈されてきたマルクスの、労働思想というよりはむしろ資本の原理的認識に想を得たものと考えられる。全体主義の根源に資本主義の原理が控えているとするところに、本論文の複眼性を確認することができる。

とはいえ、次のような疑問点を同時に指摘せざるを得ない。

第一に、全体主義の無限増殖運動は、現代において「労働」が「仕事」や「活動」の要素をも取り込んで「キメラ化」し、余暇が観照や活動ではなくもっぱら「消費」に費やされる大衆消費社会に固有なものと捉えられる一方、それはまた経済の政治への侵入による社会的なものの出現、つまり近代資本主義の成立と時期を同じくするとも捉えうる曖昧さを残している。のみならず活動を「仕事」（観照）に取り込むプラトン以来の西洋政治思想の伝統がアーレントによって批判されているという指摘は、全体主義の起源がさらに古典古代に遡って探られているという解釈も許す。

第二に、経済が政治に流入し、人為が自然に侵されるときに「社会的なもの」が出

現し、統治が管理に縮退するという見方が前提されているが、むしろ円環をなす単なる生存（ゾーエー）ないし家政（オイコノミア）の領域に、直線的で人為的な政治が侵入するところに「腐敗」が始まるのだと、上の見方を逆転することもまた可能である。政治と活動も他者の視線に曝されている以上、「無限増殖運動」への傾向をもつと考えられるからである。

第三に、「労働する動物」とは区別された「労働者」が公共圏に現れたことをアーレントが高く評価していた点が本論文のライトモチーフといってよいが、そこで評価された「群衆たちによる自律的統治」とその「束の間」の輝きは、やはりアーレントが評価した「複数性」や「持続性」といかなる関係にあるのであろうか。言い換えれば、アーレントが「労働者」に期待したのは、「安定した統治」のもとでの「絶えざる境界線の引き直し」なのか、それとも「新たな統治形態」を打ち立てることなのか必ずしも明らかではない。

以上のような問題点を指摘できるとはいえ、このことは本論文の問題提起の独創性と、行き届いた文献渉猟、読解の正確さ・緻密さを損ねるものではない。全体を通して、政治が経済に浸食されるところ（社会が出現するところ）に資本の無限増殖運動が生まれ、それが全体主義の無限増殖運動の温床となるという本論文の基本的図式の検証はまだ緒に就いたばかりであり、今後さらに理論的に彫琢されることが期待される。

本学位申請論文の研究成果は、すでに複数の学術雑誌に掲載され一定の評価を獲得しており、その独創性と学術的価値は高く評価される。したがって、本学位申請論文は、共生文明学専攻 現代文明論講座に相応しい内容を備えており、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年6月16日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行なった結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降